

赤木先生の書かれた書物の書評ということであるが、まずは全体を通じた要約を自分なりの解釈を含め述べたうえで、私見を述べてゆきたいと思う。

[1] 戦略という観点からの全体の要約

アメリカの戦略変換点は今までに三度あった。一つが1814年8月24日のイギリスによるワシントン焼き討ち、次に1945年12月7日の日本軍による真珠湾奇襲、最後に2001年9月11日の国際テロ組織アル＝カイダによる同時多発テロである。

十九世紀にイギリスのワシントン焼き討ちを受けて以降、アメリカのとった安全保障のスタンスは、アダムスが提唱した「拡大」であった。それを支える戦略としてとられたのが先制、単独行動主義、覇権である。

まず「先制」は、この時代においては中長距離戦略兵器（戦闘機等も含む）が存在しないことから西半球のみに焦点を当てればよいことを前提として、自国の安全保障を確立するには、隣接する弱体化した国家“破綻しそうな国家”に他ライバル国家、特にヨーロッパ勢が勢力を伸ばす恐れがある場合、先制行動をとることが必要である、ということだ。スペイン領フロリダや、メキシコ領テキサスなどがその良い例である。

次に「単独行動主義」は、アメリカの行動の自由を維持するため、長期的国益の調整の義務を避けるため、同盟等に拘束されるべきではなく、自国で対処するスタンスをとるべきとするものである。西半球植民地化排除宣言の英米合同声明のアメリカ単独宣言や、国際連盟未(不)加盟などが良い例である。

最後に「覇権」とは、アメリカの安全保障を確立するには、北アメリカ大陸の支配をめぐった果てしない戦争を防ぐことが重要であり、そのためには北アメリカ大陸において他大国とは共存すべきではなく、アメリカに近接する場所に他大国が主権を獲得させないようにし、圧倒的優位を確立し維持すべきであるというものである。したがって北アメリカ大陸における覇権確立が目指された。

二十世紀に迎えた第二の転換点は、日本軍による真珠湾攻撃である。転換の環境的要因としては、「距離」という防衛手段が、戦略兵器の発達により無効化してしまったことが挙げられる。また心理的要因としては、第一次世界大戦のドイツの敗北により、切迫した危険がなくなったことから一種の安心感がアメリカを包んでいたことも挙げられる。真珠湾攻撃以後、転換の中心的役割を担ったのはフランクリン・ローズヴェルトである。

彼がとったスタンスは、アダムスの主要三要素のうち、先生と単独行動主義を放棄するという、驚くべきものであった。英ソと文字通り「大同盟」を結び、アメリカは「兵器廠」として同盟国に依存することで自国の損害を最小限に留めたのである。

冷戦にあつては、彼の戦略の継承者達が、最高の環境を作り出していた。マーシャル・プランをヨーロッパ勢・ソ連両方に申し出、見事予想通りソ連が拒否、ソ連に自ら壁を作らせることに成功したのである。一方アメリカはヨーロッパ勢・日本を始め、多国間主義を採用し、形勢的に優位を形成した。そこには米ソ両勢を比較する「より悪いのはどちらか」という、覇権を同意の下に作り出すのに優位な環境作りも功を奏したといえる。

最後の転換点は9・11と呼ばれている同時多発テロである。冷戦終結以後、アメリカのスタイルとしては民主主義を拡大するために、外部世界に関与するだけで事は足りると考えられていた。それだけにこのようなテロはかなり衝撃的であった。問題なのは、今回は対国家ではないので、今までの原則がまったく対応しないということだ。そこでとられたスタンスは、テロリストがどこにいても、テロリストを支援する政権とともに彼らを特定し排除する、そのためには先制も厭わず、単独で行動することも躊躇しないという大転換であるが、それは十九世紀の回帰である。それに加え、多国間協調を重視も挙げられ、イラク戦争などを通じた大戦略は評価に値するものとなったが、イラク戦争での外交を含め諸政策があまりに稚拙なものとなり、同意が得られないままである。

[2] 批評、及び私見

ここからはこの書物に関する私の私見を述べてゆきたいと思う。一つ一つ述べてゆきたいものもあるのだが、字数という制限がある以上、あるひとつの論点を取り上げて批評を行いたい。先生の書物に対して、批評を行うというのは初めてだが、できる限り客観性を失わないように論じたいと思う。

私が取り上げたいのは、9・11以後のブッシュ政権のアフガニスタン及びイラクに対する戦略である。というのは、ギャディス教授も、9・11以後のブッシュ政権の戦略について述べることを前提として、過去の戦略を振り返ったのではないかと考えるからである。

9・11以後、ブッシュ政権がとった戦略は多国間協調を重視した上での、先制の回帰であり、またその戦略は他大国の同意を得てはいないことは上において述べた。ではそこまでイラク戦争、とりわけサダム・フセインにこだわる理由とはいったい何なのか。

本書においては、テロ組織・支援国家への牽制、石油の安定供給の実現、中東の反動的政権排除への足がかりになる、国連の権威回復など、多くの魅力が挙げられている。

しかし、拒否すると考えられていた国際査察団を予想外にもイラクは受け入れ、これを機に攻撃の機運を高めようとしていた米英の戦略に乱れが生じ始めた。その後、査察団の「大量破壊兵器存在せず」の判断により米英の主張の信頼はなくなり、主要国の同意は全く得られなくなってしまった。その背景にはアメリカが覇権を公に誇示し始めたことに対する危惧もあった。にもかかわらず、始めてしまったイラク戦争は、当初はイラク国民が歓迎するほどの成功振りであったが、占領の不完全さ、状態の再保障の不備から、依然として反対の様相を呈している。

この状況に対し、ギャディス教授は、戦略としては評価に値するものであるが、覇権は同意なしで

は維持できず、また同意には自分と比べてより悪い状況が他方に存在することが必要であることを忘れてはならない。多国間協調をもっと重視して行くべきではないかと結論付けている。

少し長くなってしまったが、おおよその概略はこうなるであろう。そこで私が指摘したいのは、このような大戦略を立てるのは結構だが、結局このような戦略によって民主主義を中東に広げること、アメリカ、その他諸国の安全保障が本当に確立されるのか。政権は肯定的に答えている、と述べるに留まっているが、その論理的説明が欲しかった。私だけなのかもしれないが、イラクの動向を見ていて気になるのが、まさにそのことであるのだ。押し付けられた制度は、押し付けられたものにとっては憎たらしいものの何物でもないだろう。結局憎悪は消えず、旧の木阿弥になるのではないか。

私はブッシュ政権の考えるような戦略では安全保障は確立できないと思う。ギャディス教授もそのように述べ、もっと多国間協調を考えるべきだとしているが、私はそれ以前に、ブッシュ政権の考え方自体に疑問符を投げかけたい。

私は「グローバル化」という観点をここに提示したい。グローバル化という言葉が叫ばれるようになったのは最近のことではあるが、私は第二次世界大戦が終わった時から、グローバル化は始まったと思う。というのも、第二次世界大戦が終わり、ソ連との対立の色が濃くなったアメリカは、封じ込めの壁の作成をマーシャル・プランというオブラートに包み、見事に成し得た。ここに、アメリカ・西ヨーロッパ勢・日本という西側、ソ連・中央ヨーロッパ・東ヨーロッパという東側という対立構造が作られたが、この時点で、アメリカの民主主義システムは「西側」というフィルターを通して諸国に行き渡ったはずである。そこからがグローバル化の始まりである。

そして冷戦が終わり、西側の勝利が決まり、世界主要国はひとつにまとまる意向を見せた。もちろんそれぞれの国益をめぐる外交戦略などは絶える事はないが、それでも基本構造を共有することにはなった。つまり、お互い共通のルールを持つことになったということだ。

輸送手段の急激な発達、インターネットの普及などによって世界で「グローバル化」と叫ばれるようになったころ、共通のルールを持った国々は、大きな恩恵を受けていた。その一方で、グローバル化に乗り遅れた国、つまり共通のルールを受け入れなかった国は恩恵を受けることなく、一部の支配者層が少ない利益をさらに独占している状況が続いていた。それが中東、アフリカ諸国等である。

しかし、システムを整えたグローバル化は不可逆的に世界に広がりつつある。その諸国の拒絶反応が9・11に現れたのではないかと考えている。彼らはグローバル化を受け入れるにしても、もう既にグローバル化の恩恵を受けている国々の無関心を決め込む態度を知っている。強力な環境規制が敷かれると新規グローバル化勢は発達の阻害を受け、いつまで経っても追いつくことができず不満が溜まるが、それはもう発達済の諸国にとってはどうでもいいことである。結局今更こちら側に入っても状況は相変わらず厳しく、国の独自性など考慮されずどんどん国家内部をかき回され、利己的な主要国の思うがままとなってしまうのだ。特に受け入れた後の改革においては、富裕層の解体・偏った富の再分配が行われる事はもう目に見えている。どうして彼らがグローバル化を受け入れるであろうか。ましてや一般庶民は情報源に乏しく、限られた情報にしか触れていな

い。統治者はこのような、富を溜め込むのに非常に有利な状況をどうして進んで捨てるであろうか。

加えて、そもそもアル＝カイダが反米感情を抱くようになったきっかけは、イスラエルを支援するアメリカが、クウェート政府の要請があったものの、米軍をイスラム教の二大聖地マッカ(メッカ)・マディーナ(メディナ)を領有するサウジアラビアに常駐させたことによるのではなかったか。つまり、民主主義による代議制の欠如が原因とするブッシュ政権の考えは少し浅はかではないだろうかと言いたいのである。

さらに批判を言わせてもらおうと、やはりイラク戦争での政策の甘さが挙げられるだろう。確かにテロリストの温床となっている国々を爆撃して焼け野原にしてしまうことはすぐにできてしまうが、それでは自然な形で世界の繋がりを作り出すことはできないだろう。侵攻して、単に原因となっている一人のリーダーを別のリーダーに変えても、その国々はまた何かの弾みで元の状態に戻ってしまうに違いない。

私の意見では、この戦いでは軍事力に訴えるような解決法は向かない。ましてやあのような「有志連合」では話にならない。やはり、「文明」には差異があって当然であり、押し付けることはできない。またグローバル化によって生じる結びつきやコンテンツの流れに対する反応も、文明ごとに違うので、やはり共通のルールを持つのは難しいと考えられる。例えばインターネットという結びつきが、ポルノ画像というコンテンツの流れへのアクセスを容易にするのであれば、すべての文明が喜んで受け入れるとは到底考えられない。

事は急を要してはいない。ましてや大きな爆撃を行ったり、国家単位で攻撃することが解決につながるとは考えにくい。今はイラクも不安定ながら成り立ってはいるが、いずれ何かの弾みで元に戻るであろう。テロとの戦いは今後長く続くはずである。大事なものは“調和”をとることである。イスラム諸国と我々の差異を認めた上で、お互いに妥協点を模索するのだ。アメリカは先制という過去への回帰を捨て去り、多国間協調の姿勢を維持し、完全なるコンセンサスの上に立ち、戦略的な外交を展開してゆくべきである。イスラム教を特異なものと決め込むのはよくないことであるが、我々とは違う「何か」が存在しているのは確かだ。そこを踏まえ、グローバル勢代表として、ブッシュ政権には新たな形の安全保障を目指してほしい。私はそう願っている。